石仏調査ニュース

ちがさきの石仏

第2号

発行　茅ヶ崎市文化資料館
（市教育委員会）
編集協力　文化資料館と活動する会
（民俗行事部会）

連絡先　茅ヶ崎市文化資料館
〒253-0055　茅ヶ崎市中海岸2-2-18
☎0467-85-1733

茅ヶ崎の石仏調査のその後

平成八年十一月四日に第一回の石仏調査が行われて、九回の調査が行われたことは本石仏調査ニュース第一号で報告しましたがその後、雨にたたられながら、更に、一回の調査が行われました。

第六回までの調査内容は石仏調査ニュース第一号で既にそのあらましは報告しており、繰り返しになりますが、これまでの調査場所などの概略を報告いたします。

第一回　平成八年十一月四日
場所　柳島一ー三　善福寺境内
個体数　八　基

第二回　平成八年十一月三十日
場所　柳島二ー三ー一〇　八幡宮境内他
個体数　一〇　基

第三回　平成九年二月二十一日
場所　柳島海岸三ー四〇厳島神社境内他
個体数　一一　基

第四回　平成九年三月二十一日
場所　松尾三　神明神社境内他
個体数　一一　基

第五回　平成九年四月十八日
場所　南湖二ー九ー三四　西運寺境内他
個体数　九　基

第六回　平成九年五月十六日
場所　南湖五ー五ー一　住吉神社境内他
個体数　一七　基

第七回　平成九年五月十六日
場所　南湖一ー二ー一一　金剛院境内他
個体数　一一　基

第八回　平成九年十月十七日
場所　中島一ー三四　日枝神社境内他
個体数　二三　基

第九回　平成九年十一月二十一日
場所　下町屋一ー六ー一九　神明社境内
個体数　五　基

第十回　平成十年二月二十日
場所　下町屋二ー一四ー一五梅雲寺境内
個体数　一四　基

以上が平成九年度までの調査の概要です。

平成十年度も茅ヶ崎市の石仏類の調査が文化資料館を中心に市民有志の手によって、地道に進められています。

そのほかの活動として、調査した石仏類は一基ずつカード化され、また、カードの分類整理の方法が検討されています。

馬頭観世音
（仏教辞林から）

今後の予定

毎月第三金曜日に調査を行います。
八月二一日
九月一八日
一〇月一六日
一一月二〇日

雨天の場合は資料館で資料整理を行います。

また、九月二四日、一一月二六日、二月二五日は、資料館で勉強会を行います。

寄稿・投稿・会員通信

馬頭観音の偈頌

塩原富男

南湖一丁目、金剛院西の共同墓地の道端に、三基の馬頭観音が建っています。左側の角柱形の碑は、高さ四十センチ、正面中央に「馬頭観音菩薩」、その上部に合成文字？があり、両脇に「為悦衆生故／現無量神力」、さらにその両脇にかな文字が刻まれています。建立は昭和六年、前島家とあります。

中央上部の合成文字は「妙」「以」の文字

の合成ではないかと思うのですが、なんと読ませるのか解りません。「妙法を以て？」などと当て読みをして日蓮系ではないかと思ったりしましたが、独断にすぎるかもしれません。

両側の五言は「偈頌」と判断しました。石仏には施主、講中の名前とともに造立趣旨や願文、この碑のように偈頌といわれるお経文の一部とみられるものが刻まれたものをよく見かけます。

この碑の偈頌について『石仏偈頌辞典』によって調べてみました。解ったこと、私見を記してみます。

出典「法華経如来神力品第二十一」

諸仏救世者
住於大神通
為悦衆生故
現無量神力
舌相至梵天
身放無数光
為救仏道者
現此希有事

「諸の仏・救世者は　大神通に住して　衆生を悦ばしめんがための故に　無量の神力を現したもう。舌相は梵天に至り　身より無数の光を放ちて　仏道を求める者のために　この希有の事を現したもう」と出ており、二つの所在例をあげています。

一つは前掲文で、一つは「住於大神通　為悦衆生故　現無量神力　舌相至梵天」で、この碑と同じものは出ていませんでしたが、この両者にみえるなかに同じ文言がありました。

したがって、この碑の「為悦衆生故　現無量神力」は「衆生を悦ばしめんがための故に無量の神力を現したもう」と読むかと思います。力不足で難しい経文の解釈はできませんが、これだけでは「何が衆生を」の何が抜けているように思います。

前掲文のなかから判じますと「救世者が」ということになるかと思います。そして、これは中央上部の合成文字と関係があると思いましたが、これは偏見かも知れません。

最後に残るもっとも外側のかな文字ですが、非力で解読できません。あれこれご教示いただければありがたく思います。対面する石仏から、造立者の意図を知るのは困難な作業だと、しみじみ思います。

蛇足ですが、「偈頌」とは仏教事典などによると、「偈（げ）」は梵語のガータ（Gatha）で、音訳して「頌（じゅ）」。梵漢を併称して偈頌とする。とあり、同じく意味を重ねた熟語と理解しました。

「偈」とは、仏の徳を褒め讃える韻文体の経文（『角川中漢和辞典』）とあり、文体は四言・五言の詩形が多いようです。

石仏に接する者としては、軽々の判断や先人の解釈を鵜呑みにすると誤りを犯しやすいので、自ら出典を明らかにする努力が必要だと辞書の著者は言います。とはいえ、中々、門前の小僧とはまいりません。

初冬三五

加藤幸一

下町屋二ー十四に、町屋山梅雲寺（浄土宗）があります。この寺は、慶長四年（一五九九）の建立、開山は広誉梅雲と伝えられ、寺号になっています。

山門を入り、左奥に御社があります。そこに「難除三宝荒神」がまつられ、この三宝荒神は、現在、ご住職のお話では、秘宝のため開帳されていないとのことです。

江戸時代には、江戸で開帳したほどの信仰で、南品川にある海雲寺「千躰三宝荒神」とともに関東では多くの参拝者を集め、有名だったそうです。

三宝荒神というのは、仏（仏陀）、法（仏陀の教え）、僧（教えの修行者）の三宝を守護する神で怒りの相を示し、不浄を嫌い、清浄な火を愛すると言われ、火を燃やすかまどの神とされる神様です。

かまどのある台所にまつれば、一切の災難を除き、衣食住に不自由しないと言われています。

この三宝荒神の碑が梅雲寺山門前にあり、碑の高さ一四〇センチ、幅四三センチ、厚さ二九センチで、表面には「難除三宝大荒神慈覚大師御作」、向かって右には「町屋山」、左に「梅雲寺」、その裏面に「明和元年甲申歳初冬三五第十三世海誉代」と刻まれています。

明和元年は西暦一七六四年で、甲申歳で、「初冬」は、十月、ほかに神無月、応鏡、孟

冬、小春という呼び名もあります。

さて、三五（さんご）ですが、『広辞苑』によると、「三と五の積」とあり、「十五、十五歳、十五夜、長さ三尺五寸とあることから、琵琶の異称」ともあります。つまり、三五（さんご）は十五日のことのようです。十五日は、ほかに「中五日」、「中旬五日」との呼び名もあります。

碑にある、「初冬三五」は、「十月十五日」であるのに、なぜ「三五」と示したのでしょうか。

元文四年（一七三九）初演の浄瑠璃「ひらがな盛衰記」の中に、

二八一六で文つけられて、二九一八でついその心、四五の二十は……。

また、

年は二八か二九からぬ
女の年映えは大体一六から一八ぐらいが花なら盛りで一番美しい頃合いでかわいらしい。「二九からぬ」に、憎からぬを同音異義として用いています。

外にもありますが、数字の積や和がしゃれとして一般に用いられていたようです。

明和二年（一七六五）に柄井川柳編「俳風柳多留」初版が刊行され、江戸後期の文化のしゃれ、ひにく、こっけいを好む、化政文化の初期ともいえる当時の世相の一面が、東海道、南湖の立場、柳島の湊を通じて、文化交流を垣間見ることができるのではないかと思われます。

三面六臂の馬頭観世音

塩原富男

二月二十日、下町屋二ー十四、梅雲寺（浄土宗）墓地の入口の石仏群を調査しました。その中の像容を刻む碑の一つを三面六臂の馬頭観世音として調べました。

この碑は、茅ヶ崎市史3考古民俗編（以下市史と表記）の石仏「馬頭観世音」の項に登載されていません。造立当初からの経緯は不詳ですが、市史関連調査（昭和五十年前後）当時には既にここに存在したかと思われ、これを三宝荒神と間違えていたのではないかと思えるふしがあります。以下に私見を述べてみます。

この碑は、高さ六四センチ、幅二七・五センチ、厚さ一四センチで光背形の砂岩？に厚肉彫りされ、反花（かえりばな）角座に角の蓮華座を乗せた台座にまつられています。

像容は、全体が白く粉が吹いたような風化が認められますが、燃え上がるような焔髪の頭上正面に馬頭をいただく三面忿怒相（両側二面はやや小さめでおとなしく見える）の坐像（半跏趺座・はんかふざ）、着衣は天衣・条帛を纏う菩薩スタイルと思われます。

・胸元で結ぶ印相は、一見合掌印に見えますが、よく見ると両人差し指を先端で合わせた明王馬口印、俗に馬頭印を見ることができます。この印相は馬頭観音の特徴と言われているものです。

持物は判然としないものもありますが、右手上が矛（三叉鉾）、下は斧、左手は上が宝輪、下は宝棒（？）と見えます。

この像容は「石仏調査ハンドブック」（庚申懇話会編雄山閣刊行）などの解説書によると、馬頭観世音の特徴をしめしており、持物は像により相異はあるが、一面合掌像に続いて多いのが三面六臂だとか三面八臂もあると出ています。

銘文は、本体両面に「享和三歳（一八〇三）／亥八月吉日」、反花台座正面に「願主／講中」、向かって左側面に「世話人／政五郎／八十八／三平／徳平衛」と読めます。紀年は市内の馬頭観音で三番目に古く、三面六臂は市内唯一です。

碑全体の造りも丁寧です。講中とある建立者はどんな人々だったのでしょう。東海道を往来する馬方連中でしょうか。

ところで、市史の「三宝荒神碑」の項を見ますと、所在地梅雲寺として、山門前の碑に続けて「享和三歳　亥八月吉日　丸彫　講中五人」とあり、石仏の三宝荒神が存在することになっています。丸彫、講中五人に対し、調べた馬頭観世音は厚肉彫、世話人と人名四人と記載が異なるものの紀年は全く同じです。これは偶然とは思えず、三面六臂の馬頭観世音を像容のよく似た三宝荒神と誤認したのではなかろうか、だから馬頭観世音の項に記載がない。私の独断的見解ですが。

ちなみに石仏調査ハンドブックなどによると、三宝荒神の像容は、三面六臂忿怒の立像で、持物が金剛鈴・宝珠・褐磨（かつま）・独鈷・蓮華・宝塔が一般的であるとありま

す。

梅雲寺には山門前に「難除三宝大荒神慈覚大師御作」の碑があり、三宝荒神がまつられていると聞いていますが、不勉強で未だ拝観したことがなく、確かなことは言えませんが、伝承の荒神はたぶん木造ではないかと思います。市史に見える石仏の三宝荒神ではないと思います。それでは石仏の三宝荒神はどこにあるのでしょう。今回調べた石仏は、前述のように明らかに馬頭観世音です。

それにしても何回か訪れたこの寺で、この碑を確認できなかった不明を恥じ、伝説の三宝荒神にお目にかかれる機会があればと願っています。

調査済み石仏一覧

第一号記載以降の石仏を紙面の許す範囲で紹介します

■第七回　平成九年七月十八日（金）

○南湖一―二―二七　共同墓地西側

馬頭観世音　昭和七年（一九三二）文字

馬頭観世音　昭和六年（一九三一）文字

馬頭観世音　明治四〇年（一九〇七）文字

六地蔵　宝暦八年（一七五八）　丸彫立像

○南湖一―一―九　金剛院西側共同墓地

観世音菩薩　文化一三年（一八一六）

地蔵菩薩　無　丸彫立像

○南湖一―二―一一　金剛院

観音菩薩　無　丸彫立像

供養塔　宝永三年（一七〇六）

弘法供養塔　無　線刻板碑

六地蔵塔　昭和五〇年（一九七五）　線刻

地蔵菩薩　無　丸彫立像

■第八回　平成九年十月十七日（金）

○中島二五三　清水氏宅前

道祖神　無　浮彫双体立像

○中島西町一三九　大森氏宅前

道祖神　明治一五年（一八八二）　文字

道祖神　年　剥落　浮彫双体立像

○中島一〇九〇　岩淵氏宅前

道祖神　文政三年（一八二〇）浮彫双体立像

○中島一一三四　日枝神社

道祖神　明治一八年（一八八五）　文字

鳥居　昭和五年（一九三〇）

社名碑　昭和一九年（一九四四）

狛犬　昭和五八年（一九八三）

石仏残欠　無

庚申塔　享保八年（一七二三）浮彫青面金剛立像

庚申供養塔　安永三年（一七七四）　文字

○中島一〇五二　浄林寺

地蔵菩薩　無　丸彫立像

地蔵菩薩　無　丸彫立像

不詳　不明　浮彫立像

聖観世音菩薩　享保一六年（一七三一）浮彫立像

台座四つ重　文化三年（一八〇六）文字など

水子地蔵　昭和五六年（一九八一）丸彫立像

馬頭観音　文化七年（一八一〇）浮彫立像

地蔵菩薩　不明　丸彫立像

馬頭観音像　享和二年（一八〇二）浮彫立像

○中島三二三　左近稲荷社

庚申塔　寛政一二年（一八〇〇）　角柱

石灯籠　文久二年（一八六二）

■第九回　平成九年十一月二十一日（金）

○下町屋一―六―一九　神明社

厄神大神　嘉永二年（一八四九）笠付角柱文字

鳥居　昭和五九年（一九八四）神明型

聖観音菩薩（？）文化一三年（一八一六）浮彫立像

道祖神　享和二年（一八〇二）　文字

道祖神　明和七年（一七七〇）浮彫双体立像

■第十回　平成十年二月二十日（金）

○下町屋二―一四―一五　梅雲寺

馬頭観世音　享和三年（一八〇三）浮彫立像

観世音菩薩　天明六年（一七八六）　文字

弘法大師座像　無　丸彫座像

六地蔵　無　丸彫立像六基

徳本名号塔　文政三年（一八二〇）　文字

庚申塔　貞享二年（一六八五）　浮彫立像

三宝荒神碑　明和元年（一七六四）　文字

手洗石　無　無

不動尊　無　浮彫座像

地蔵菩薩　慶安四年（一六五一）浮彫立像

名号塔　寛永元年（一六二四）　板碑